

教育心理学教室教官の研究状況報告

この1年の歩み（昭和58年から昭和59年まで）

村上英治

1) 昨58年10月、私どもの教室にかけがえのない、また私にとって30年来の知友、大橋正夫教授を喪なった。昨年の紀要第30巻に追悼のことばを寄せたが、2ヶ月あとは巡りてようとする一周忌を前に哀悼の思いひとしおのものがある。また同じ年の暮には堀要教授と、そしてさらにこの年5月には三木安正教授の訃報にも接した。共に障害児療育の道へと私を方向づけていただいた先達とも、恩師ともいふべき人である。私自身個人的にも、また何よりも多くの障害児・者、ならびにその家族にとって痛痕きわまりない悲報であった。謹んでその御冥福を祈るとともに、その霊前で一層の精進をと誓うしかない。

2) この年7月20日、大正13年^{きのえね}甲子の同じ日に生を享けて60年、暦へめぐって還暦の日を迎えた。いたずらに馬齢を重ねるのみで、これという仕事も残し得なかった私に、多くの人から祝福のことばをいただいた。身にあまる倅せを今改めて思う。特に池田博和君を中心に、後藤秀爾、赤塚大樹、細野純子の諸君の手によって、私自身の監修ということで、還暦を記念しての出版が企画され、各位の御高配を得てその当日に上梓する運びに到った。名古屋大学出版会刊行「生きること・かかわること——人間への臨床心理学的接近——」である。上記4君をはじめ多くの若い仲間たちの論文16編が寄せられた。心身障害、精神障害それぞれを対象として、具体的臨床の場での実践の歩みがそこにそのままの形で露呈されている。私のもとに集い、そして巣立っていった人たちの「臨床のこころ」がそこに躍動する。若い人たちの今後の脱皮、成長を心から念願するほかはない。

3) 附属学校長として3年目に入った。これで最後の年となる。中等教育の現場の厳しい状況をこうして体で学ばせてもらったことは、私にとってほんとうに何よりも収穫であった。障害児・者との取り組みにこそ30年終始してきた私にとって、こうした健常の世界をそれこそ懸命に生きる思春期の諸君とのかかわりを、今まで以上にこの最後の年、大切にしていきたいと考える。附属学校そのものの存立の意義が改めて問いなおされる現時点において、学部との緊密な連繫のもとに、し烈な受験

体制の中で未来を志向する青少年の発達のみちすじを、どのように見すえていくべきか、今日的課題として検討されねばならない観点も少くない。入学試験制度の改革を契機としてではあるが、「附属学校のあり方を考える委員会」が発足し、かなりインテンシブに会合がもたれているのもこの線に沿ってのことである。

4) 通称MR療育、母子通所形態による早期集団療育の場での対象児の障害は、いよいよ重さを加えてきた。これら重度・重症の子どもたちにも、単なる医学的ケアのみでなく、むしろ心のつながりを大切にする意味での療育的ケアを意図する私どもの活動では、幸いにして昨年度はトヨタ財団から研究助成金を得ることができた。従来につづけてその年どしの実践をより一段と展開していくと共に、いわゆる同窓の連帯を深めることにより、14年前この活動を始めて以降の親たち、また療育者たちの意識の変革を探るべく、昨年秋、附属学校体育館で大運動会を企画することが出来たのも、この研究費の援助のおかげである。東海心理学会第33回大会での発表をもとに本紀要にもその成果の一部を報告しているが、なお多くの課題を従来の線に沿って多面的に追究していくつもりである。

こうした早期療育の重要性は、Bijou博士の指導のもとにアメリカでは、Portage Programとして多くの注目をあびているところである。昨58年11月には、Bijou博士の来日の機会を得て、このプログラムの推進をはかる講演会をもつことができた。関係各位の協力で盛況であったことも、この集いを企画した責任者として心うれしいものがある。10月にはまた連合王国 Guilford 教授を教室で迎え、その講演をきくことができた。こうした重なる国際交流をとおして私なりになお、多くのものを学びとっていきたく考える。

5) 一昨年発足した日本心理臨床学会、日本人間性心理学会は、ともに昭和58年にはその第2回大会を、中京大学、文教大学の担当で開催する運びに到った。心理臨床といい、人間性の心理学といい、その実践的側面とか、内側からの人間接近とかいった現点がより強調される方向性に沿って、私自身その双方の学会の運営をすすんで

担っていくつもりである。ちなみに日本人間性心理学会は、その第3回大会を名古屋大学で引き受けることになった。今年10月に開催される予定で、今その準備に臨床系全員で当たっている段階である。

6) 公務の多忙のため、昨年はずたたび蓼科高原でもたれた、名古屋大学学生相談室主宰の、学生を対象とする「自己発見グループ」には参加できなかった。しかし本来的なエンカウンター・グループとはもちろん程遠いものではあるにしても、附属学校で、私は高校生を対象として「自己発見」といったテーマをかかげ、昨年10月以降、週1回の必修クラブを自ら担当する試みをはじめた。思春期をさまよう高校生との直接的なふれあいを意図するものであったが、それなりにかなりの反応があり、人間が生きていくことの不思議さ、おもしろさを、彼らと共に改めて感じさせられたことは、私にとって何よりもうれしい。人と人の生身のふれあいをこのときより一層大切にしていきたいと考える。

7) 全国学生相談研究会議の第17回の集いを、今年も新春早々の江の島海岸で、東京工業大学のお世話でもつ

ことができた。いつもながらのカウンセリングのこころを、今回は、たまたまこの3月退官されることとなった、東京大学佐治守夫教授と東北大学宮川知彰教授との対談の中に、まざまざとまた汲みとることができた。この席に司会の役割をになって、両先達の歩みに心うたれとともに、佐治教授退官後、はからずもこの会議の会長の重責を背負うことになっただけに、これから一層の精進を誓う気持でいっぱいである。

8) 誠信書房からは、九州大学成瀬悟策教授監訳になる、Hilgard 教授編、「アメリカ心理学史」が数年の歳月を経て、昨年9月ようやく刊行の運びに到った。この中で、格調高い Allport 教授の1939年会長講演を翻訳する機会を与えられたのは光栄である。「心理学者の準拠」と題するこの難解な講演の中に、往時のアメリカ心理学勃興の機運をよみとることができる。これらの伝統をうけつぎ、日本でのより独自の展開をはかることが、今の私たちに寄せられた期待であると私は考えたい。

(昭和59年8月7日)

研究経過報告 — '82年秋～'84年夏 —

小 嶋 秀 夫

〔児童発達観の研究〕 '83年4月にスタンフォードの行動科学高等研究所で開かれた「日本と米国における児童発達」会議に出席し、「社会および個人における信念・価値体系としての子育ての諸概念」と題する発表を行った。幸いにも、それはかなり多くの人に興味をもってもらえ、来年には、フリーマンから出る本の1つの章として現れると思う。それは概括的な話であったが、より分析的な話を、つぎの2つの学会・会議でした：「江戸期の子育ての書に現われた乳幼児発達観」第85回日本医史学会総会（84年4月、名古屋）；「江戸期日本の子育ての書および医書における児童発達理論」第29回国際東方学会会議（84年5月、東京）。とくに後者で受けた多くの質問によって、今後さらに進めるべき分析の視点に気付いたのは有益であった。さらに求めにより、これらの一部を噛み砕いたエッセイを単行本の1つの章（新曜社、1983）と雑誌（ライフサイエンス、1984）とに書いた。3年ほど前のと比較すると、いくらかましな形になってきたのではないかと考えている。児童心理学ハンドブック（金子書房、1983）の1つの章の論文でも、マクロ・システム（Bronfenbrenner）としての児童

発達観の問題を論じた。

この領域でいま取りつかれているのは、1839年から10年間にわたって書き続けられた「柏崎日記」である。かねてより民俗学者によって注目され、最近でもお茶の水女子大で分析を続けている人がいる。しかし、それらの人とは別に私がそれを分析する意味はあると思う。いまは部分的な活字本に頼るほかはないが、自筆本で活字化されていない部分に必要な記述があるかも知れないので、なんとか必要な部分だけでよいから、読めるようになりたいと考えている。しかし、私の学習速度は遅く、まだ何年もかかるだろう。完全に個人的な好意から、この道での私の師匠役を買って出てくださいの方を、やきもきさせているのは、まことに申し訳ない次第である。さらに最近、ある歴史家が発見し研究書を出された「熊野観心十界曼荼羅」なるものの中の「人生の段階」図にも心をひかれている。外国のはかなり知っていたが、日本にそのようなものがあるとは思ってもみなかった。これらの領域への興味にしても、発達研究者としての立場は堅持しているつもりである。

〔家族関係〕 山田洋子・村上京子・河合優年との共同